跡見学園女子大学国文学科報　第二十六号　（平成十年三月十八日）

女三の宮の恋

――もう一人の〈紫の上〉の行く方――

三村友希

はじめに

女三の宮という女性を言葉で表わそうとすればするほどにわからない。皇女という高貴な身分に不似合いな幼さ、未熟さばかりが際立ち、女三の宮の生々しい感情はあまり伝わってこないのだ。その幼さは、物語の負の原動力として、機能性の側から理解されがちである。しかし、やがて女三の宮自身が、その幼さによる非があったにせよ、過ちを犯して、否応なく悲劇に呑みこまれていく姿はあまりに痛々しい。朱雀院最愛の皇女から光源氏の正妻へ、さらに柏木の盲目的な恋の対象となって密通事件を引き起こし、罪の子薫を生み、尼へと流転してゆく、その歩みの過程に女三の宮の体温を感じたい。傀儡ではない、生きた感情と身体をもつ女三の宮が確かにいる。

女三の宮の物語は、紫の上の苦悩、発病へと向かう物語と決して無縁ではない。従姉妹どうしのこの二人は、同じく〈紫のゆかり〉であることによって光源氏と結ばれた。また、光源氏は、紫の上を少女の頃から養育して妻とした「親ざまの夫」であった。女三の宮がもう一人の〈紫の上〉として登場し、「親ざまの夫」たるべく光源氏が選ばれたことに着目して、女三の宮と光源氏の夫婦像、女三の宮と紫の上との関係を考えることで、生きた女三の宮像への問いかけとしたい。そこから物語はどのように見えてくるだろうか。

あまりに希薄な女三の宮の性格描写からは、野村精一氏のように「女三宮は、光源氏を愛したのだろうか？　いや光源氏こそ、女三の宮を愛したことがあっただろうか[注1]――？」との疑問もおのずと生じてくる。そして、武者小路辰子氏は、恋などまだ知らない、いわば女性として開花するより前に成長を止められたままの女三の宮像を捉え、光源氏を愛さなかった、ただ一

人の女性であるとした。[注2] また、深沢三千男氏は、女三の宮は「虚像」として設定されており、そのことが物語の悲劇性を高めていると指摘している。[注3]

父朱雀院の不安も、光源氏との結婚も、柏木との密通とその露見も、すべて女三の宮の幼さのためであった。女三の宮は物語の中心にあって、その幼さは物語を動かしてゆく。森一郎氏はかつて、女三の宮の幼さにまつわる不吉な影をその人物造型に見いだした。[注4] 最近では、山田利博氏が、森氏や武者小路氏の論を受けて、女三の宮は徹底して負性のみをもつ人物であり、その負性こそが物語を開拓するエネルギーであると指摘し、六条院を破壊していく装置として女三の宮を捉えている。[注5]

本論の目的は、装置としてではない、生きた女三の宮像を発見することである。女三の宮は、自らの人生を犠牲にして装置として奉仕させられているのであって、そこには、そうした役割を演じさせられているがゆえの苦しみ、悲しみがある。最近のものに、罪の子薫を妊娠、出産し、母となる女三の宮の、母性を契機とする変貌を読む大坂冨美子氏の論[注6]もあるが、生身の人間として、自分の身に降りかかる災難、残酷な運命に、女三の宮がどのように向き合ったのかについては、あまり顧みられることがなかったように思う。女三の宮にも「失ってしまったもの」があったのだ。

一　「親ざまの夫」ともう一人の〈紫の上〉

女三の宮は、父朱雀院の愛情と庇護を独り占めにし、朱雀院の出家を妨げ、その処遇をめぐって周囲を悩ませる存在であった。十三、四歳のこの少女は、実年齢以上に幼く、病重い朱雀院以外に後見もない。そこで朱雀院は、「見はやしたてまつり、かつはまだ片生ひならむことをば、見隠し教へきこえつべからむ人の、うしろやすからむにあづけきこえばや」「六条の大殿の、式部卿の親王の女生ほし立てけむやうに、この宮をあづかりてはぐくまむ人もがな」（若菜上(5)二〇　なお引用テキストは新潮日本古典集成により、巻数と頁数を記す）と思い立つ。女三の宮の保護者となり、未熟さを隠し、教え、大人の女性に成長させてくれる男性に女三の宮を託すことが、朱雀院の理想であった。光源氏が幼い紫の上を育て、妻としたように。光源氏に「親ざま」（若菜上(5)二一）に女三の宮を託したい、という朱雀院の意向に、東宮も「かの六条の院にこそ、親ざまにゆづりきこえさせたまはめ」（若菜上(5)三二）と賛成する。

斎藤暁子氏が言うように、「夫の面」では皇女にふさわしい地位をもち、女三の宮の身分に見合う待遇をしてくれ、「父の面」では女三の宮の幼さを許し、包み、教え育んでくれる、その両方を兼ね備えた「親ざまの夫」が、朱雀院が考え出した、いわけない女三の宮に都合のいい婿がね像だったのである。[注7] 光源氏という「親ざまの夫」に養育され、成長して妻となった「娘ざ

まの妻」ともいうべき紫の上の先例を思い出した朱雀院は、そこに女三の宮のおぼつかない将来の希望を見いだしたのだろう。紫の上の過去が、女三の宮の未来を導いた。光源氏は紫の上養育の過去をもう一度再現することを求められ、女三の宮はもう一人の〈紫の上〉への成長を期待されているのである。

皇女の結婚に関しては、今井源衛氏が、女三の宮の処遇問題をめぐる朱雀院の思考が時代認識に則ったものであることを明らかにした[注8]。また、今井久代氏は、皇女の結婚が増えたとはいっても、皇室の裁可による結婚はごく稀であり、だからこそ光源氏が選ばれたのだと指摘する[注9]。皇女の降嫁を許されることが帝の信頼の証であり、名誉と、将来の栄達の保証を得ることであったのは、『うつほ物語』の仲忠と女一の宮の結婚にすでに描かれていた。太政大臣家の嫡男である柏木が、「皇女たちならずは得じ」（若菜上(5)二九～三〇）という高い望みをもっていたのは自然なことだったのかもしれない。しかし、女三の宮の場合は、これに「親ざまの夫」という条件が加わることになる。柏木は若く、頼りないのである。女三の宮の降嫁を正式に承引する際、女三の宮と親子ほどに年齢の離れた光源氏は「深き心にて後見きこえさせはべらむに、おはします御蔭に変りてはおぼされじを」（若菜上(5)四二）と述べた。つまり、朱雀院に代わって「父の面」をも引き受ける約束をしたのである。

また女三の宮は、〈紫のゆかり〉の血筋からたどってみても、もう一人の〈紫の上〉である。女三の宮の母は、かの藤壺の「御はらから」（若菜上(5)三四）であった。女三の宮は藤壺のもう一人の姪であり、紫の上とは従姉妹にあたる、もう一人の〈紫のゆかり〉なのだ。光源氏とて、この皇女に関心がないわけではなかった。

紫の上は、女三の宮降嫁の決定を知り、光源氏に「かの母女御の御方ざまにても、うとからずおぼし数まへてむや」（若菜上(5)四四～四五）とけなげに強がりを言う。一方で、光源氏に女三の宮を降嫁させてもなお不安の尽きない朱雀院は、「をさなき人の、ここちなきさまにてうつろひものすらむを、罪なくおぼしゆるして後見たまへ。尋ねたまふべきゆゑもやあらむとぞ」（若菜上(5)六六）と紫の上に依頼する。事実、紫の上は女三の宮に対面を申し出て、「おとなおとなしく親めきたるさまに、昔の御筋を」（若菜上(5)八〇～八一）語り、「同じかざしを尋ねきこゆれば、かたじけなけれど、分かぬさまに聞こえさすれど」（若菜上(5)八一）と、血縁を理由にして女三の宮と仲良くしようとする。まるで「姉」のように。

こうして確認される〈紫のゆかり〉は、背後に藤壺の影を透かし見せ、光源氏がこの結婚に踏み切った本当の理由を隠蔽しながらも、むしろ紫の上に、この身分高く幼い従姉妹に対して嫉妬を許さず、後見し、尊重しなくてはならない役割を課している。光源氏が「父の面」を引き受けているとすれば、紫の上は「姉」として「妹」を暖かく迎え、よき手本とならなければならないが、そこには、女三の宮の皇女という身分が横たわっ

ている。

朱雀院と光源氏の思惑と幻想が交錯するところに、女三の宮は物語の世界に押し出されてくる。皇女という身分と〈紫のゆかり〉の血筋の重さを身にまとって六条院に降嫁してきた女三の宮の、内実の軽さがあらわになった。

姫宮は、げにまだいと小さく、片なりにおはするうちにも、いといはけなきけしきして、ひたみちに若びたまへり。かの紫のゆかり尋ね取りたまへりしをりおぼし出づるに、かれはされていふかひありしを、これは、いといはけなくのみ見えたまへば、よかめり、憎げにおしたちたることなどはあるまじかめりとおぼすものから、いとあまりものの栄なき御ありさまかなと見たてまつりたまふ。

（若菜上(5)五四～五五）

若菜上の巻冒頭から朱雀院や乳母によって再三案じられてきた女三の宮の幼さを、光源氏も「げに」と確認した。藤壺に似たところなど全くない。末摘花の巻以降、長く用いられなかった「紫のゆかり」の語が見える。[注10] 光源氏は、同じ〈紫のゆかり〉として、女三の宮を紫の上の少女時代と較べ、紫の上の〈紫のゆかり〉の正統性を改めて認識したのである。

光源氏の落胆と虚しい諦めは明らかである。北山で若紫の少女をかいま見た二十二年前の春、幼く、愛らしい少女をみずからの手で育て、教えたいという欲望と、その成長に対する期待感で、光源氏の胸は一杯であったが、ここには、そうした気持ちの高ぶりはない。女三の宮への失望に比例して、紫の上への愛情がいやまさっていく。「対の上の御ありさまぞなほありがたく、われながらも生ほしたてけり」（若菜上(5)六五）とあるのは、「うち語らひて心のままに教へ生ほし立てて見ばや」（若紫(1)一九六）とあったのに呼応する。[注11] 光源氏は、紫の上の成長と、紫の上を養育した自分の「親ざまの夫」ぶりに満足している。同じ十四歳で光源氏と結婚したときの紫の上が「何ごともあらまほしうととのひ果てて、いとめでたうのみ見え」（葵(2)一一四）るほどに成長していたことを思い合わせれば、女三の宮の成長の遅れが際立つのである。紫の上の涙に濡れた衣の袖に触れ、光源氏は、この結婚を後悔するしかない。

光源氏自身が紫の上を見いだし、密かに引き取り、誰にも知らせないままに新枕を交わした、光源氏の心の衝動からの「親ざまの夫」と、朱雀院に押しつけられた「親ざまの夫」とは完全には重ならない。紫の上の場合とちがい、女三の宮の実の父朱雀院の存在が光源氏を規制し、束縛し続けてゆく。光源氏との出会いや結婚の経緯における紫の上の社会的な不安定さは否めないが、そこには光源氏の愛情と紫の上の魅力に裏打ちされた強さがある。紫の上は光源氏の世界のみで生きているのであり、だからこそ他の世界から異なる秩序を持ちこんだ女三の宮によって揺さぶられるのであるが、光源氏だけが紫の上を導いている、そのあり方は光源氏と紫の上のしなやかな強さでもある。

光源氏は、女三の宮を「おいらかにうつくしきもて遊びぐさ」（若菜上(5)七六）とばかりに思い、まるでほんの子どものような、嫉妬など知らない様子に見える幼さに救いを見いだしている。皇女の外面の重さのみが大切にされ、光源氏の実質的な最愛の妻は紫の上であるという六条院の矛盾は明らかであり、光源氏の女三の宮への態度は、明石の君や夕霧から見ても「うはべの御かしづき」（若菜上(5)一一九）「上の儀式」（若菜上(5)一二〇）を取り繕うものでしかない。明石の君が言うように「同じ筋」（若菜上(5)一二〇）であっても、人間的魅力において、女三の宮は紫の上に及ばない。女三の宮は紫の上によって相対化され、その空虚な人物像が照らし返されたのであった。

女三の宮の降嫁の翌年の春、六条院の蹴鞠の遊びの折に、女三の宮の婿候補であった柏木と夕霧が、ゆくりなく女三の宮をかいま見てしまう。身分と愛情が逆転している六条院の中で「いといとほしげなるをりをりあなる」（若菜上(5)一三二）という噂にぴったりする、女三の宮の風にもたえぬような可憐な美しさに、柏木は惑乱させられたのであった。高貴な皇女にふさわしい待遇と寵愛を女三の宮が受けていないこと、光源氏が女三の宮よりも紫の上に愛情を傾けていることが、柏木には不満なのだ。このときの夕霧による、紫の上は「さま変りて生ほしたてたまへるむつびのけぢめばかりにこそあべかめれ」（若菜上(5)一三二）という紫の上擁護の発言は的を得たものだろう。紫の上の少女時代を見守り、養育し、長い年月をともにした歴史は、光源氏と紫の上の間に、特別な結びつきをもたらしたにちがいない。朱雀院が理想とした紫の上の「親ざまの夫」の先例が、逆に女三の宮の前に立ちはだかってしまっている。

二　女三の宮の微笑みと紫の上の発病

四年の空白があり、冷泉帝が譲位し、女三の宮の異母弟が即位すると、女三の宮の皇女、皇妹としての重みはさらに増すことになる。今上帝の配慮で女三の宮は二品に叙せられ、光源氏は女三の宮と紫の上とに「わたりたまふこと、やうやうひとしきやうにな」（若菜下(5)一六二）った。御代替わりを機に、六条院の世界は女三の宮優位に傾いてゆかざるをえない。光源氏は、朱雀院に皇女降嫁を許された臣下として、その「聞こえ」を憚らなければならないのである。

女三の宮は、文字通り「空白」の時間を過ごしていたのか、二十一、二歳になろうとするのに幼いままだ。玉鬘は、光源氏が色めいた関心を寄せつつ、「親ざま」（胡蝶(4)五六）に後見していた「娘」であったが、今は「おとなび果てて」（若菜上(5)一六三）髭黒の右大臣の夫人として自立している。明石の女御も今上帝の寵愛深く、母親ともなった。光源氏は、女三の宮を「幼からむ御女のやうに、思ひはぐくん」（若菜下(5)一六三）んでいるという。かつて紫の上を「ただ外なりける御むすめを迎へたまへらむやうに」「母なき子持たらむここちして」（紅葉賀(2)一七）慈しみ、かわいがっていたときと比較すると、やや義務

感が強いようにも思われるが、曲がりなりにも、朱雀院が理想とした「親ざまの夫」として、光源氏は女三の宮を教え、育んでいるのである。

朱雀院と今上帝が、女三の宮の琴の演奏を聞きたいと願ったのを耳聡く聞きつけて、光源氏は、朱雀院五十の賀における披露を目的に、朱雀院の伝授が中断していた琴を女三の宮に教えはじめる。女三の宮が琴を上手に弾きこなすことができれば、光源氏は「親ざまの夫」として合格点を得て、朱雀院や今上帝の信頼にこたえられるのである。

毎夜奏でられる光源氏の琴の音が聞きたくて、明石の女御が宮中から退出してくる。「などてわれに伝へたまはざらむ」（若菜下(5)一六七）との明石の女御の嘆きは、紫の上のものでもあっただろう。紫の上も、光源氏から箏の手ほどきを受けたことがある。光源氏の実の娘である明石の女御が、ある種の嫉妬を女三の宮に感じていることから、このあたりを、光源氏の「娘」たちの物語として読むこともできるのではないだろうか。斎藤暁子氏は、「紫上の女三宮に対する嫉妬には、妻としての嫉妬以上に、娘としての嫉妬が潜在してい」て、「紫上の根源的な部分を侵し奪い取ってゆくものと思われたのではなかろうか」[注12]と指摘する。光源氏の「娘」であり、「妻」であるというのは、紫の上だけの特権であったはずなのに、女三の宮がその過去を繰り返そうとしているのである。父親の後見もなく、実子もない紫の上にとって、光源氏によって「親ざま」に養育された過去は、唯一の優位性であったはずなのだ。その過去を朱雀院が理想としたことが紫の上を追いつめている、皮肉な現実がある。

紫の上にとって、光源氏の女三の宮に対する「明け暮れ」（若菜下(5)一六六）の伝授という行為と、その時間は苦痛であったと思われる。無邪気に光源氏を慕い、甘えていた、失ってしまったその光景を女三の宮が再現している場面を、紫の上は容易に想像できたことであろう。大切な思い出が奪われるような不安が紫の上の胸を締めつけるのである。

女三の宮と光源氏にとっても、手を取っての伝授という行為とその時間が、二人がはじめて共有した濃密な、充実した時間として意味をもっただろう。光源氏の伝授はしだいに熱を帯びて、女三の宮も順調に腕前を上げてゆく。光源氏に上達したことをほめられたときの、女三の宮の「何心なくうち笑みて、うれしく、かくゆるしたまふほどになりにけり、とおぼす」（若菜下(5)一六八）表情には、幼い中にも光源氏に対する愛情と信頼のめばえがうかがえる。女三の宮が微笑んだのは、後にも先にもこれきりである。

伝授の甲斐あって、女楽で女三の宮は「教へきこえたまふさま違へず」（若菜下(5)一八四）琴を奏でて聞かせた。光源氏がどんなに満足しているかは、紫の上に「手を取る取る、おぼつかなからぬものの師なりかし」（若菜下(5)一八七）と言い訳めいて語り、女三の宮に「ものの師は心ゆかせてこそ」（若菜下(5)一九四）と戯れかける言葉からもわかる。女三の宮は、決し

て出来の悪い教え子ではなかった。女楽の翌晩になっても、「いといたく若びて、ひとへに御琴に心入れておはす」（若菜下(5)一九四）女三の宮は、どこかいじらしい。はじめて光源氏にほめられ、認められたことが嬉しかったのだ。琴の伝授を通して、光源氏と女三の宮は愛情を深め、朱雀院が願った夫婦像に近づいたのである。光源氏の「御琴どもおしやりて、大殿籠りぬ」（若菜下(5)一九四）という、これまでにない積極性は見逃せない。

女三の宮は、遅蒔きながら、もう一人の〈紫の上〉になろうとしつつあるのではないだろうか。そして、光源氏の女三の宮への琴の伝授の時間はそのまま、紫の上が病に向かう時間でもあった。光源氏は、紫の上に「親の窓のうちながら過ぐしたまへるやうなる心やすきことはなし」（若菜下(5)一八九）と語った。「親ざまの夫」として紫の上を愛し、守ってきた自信から出た、現在進行形の発言だろう。紫の上にしてみれば、それは美しく、はかない過去の幻想でしかない。後藤祥子氏は、「もし紫の上の発病が何かへの敗北ということになるとしたら、それは他ならぬ紫の上自身の自尊心との闘いによる敗北といってもよい」[注13]と指摘するが、光源氏のたった一人の「娘ざまの妻」であった誇りと優位性の揺らぎが、この突然の発病に大きく関わっているのではないだろうか。

紫の上が六条院ではなく二条院で静養するのは、女三の宮と柏木の密通のためばかりではない。「わが御私の殿とおぼす二条の院」（若菜上(5)八三）「わが御殿とおぼす二条の院」（御法(6)一〇三）には、紫の上の少女時代の思い出が眠っている。その記憶を呼び覚まし、光源氏の「娘ざまの妻」である自信と落ち着きを取り戻すことで、紫の上はもう一度生きようとすることができたのかもしれない。

そして、光源氏が紫の上につき添って二条院に行ってしまうと、女三の宮は取り残され、琴は「すさまじ」（若菜下(5)一九七）として片づけられてしまう。もう一人の〈紫の上〉になろうとする女三の宮の琴の音は、その紫の上の発病によって断ち切られてしまった。女三の宮が琴を奏でる場面はもうない。

三　密通・妊娠と光源氏の「誤解」

柏木は女三の宮を忘れてはいなかった。今上帝の信任厚く、女三の宮の姉女二の宮を妻に得ているが、「人目にとがめらるまじきばかりに、もてなし」（若菜下(5)一九九）体裁を繕うだけである。「同じ御筋」（若菜下(5)二〇一）であっても女二の宮に満足できず、柏木の恋は、単なる皇女崇拝でなく、女三の宮その人に向かう恋へと純化していった。

女三の宮の乳母子小侍従は、光源氏の態度を責める柏木に「これは世の御ありさまにもはべらざめり。ただ、御後見なくてただよはしくおはしまさむよりは、親ざまに、とゆづりきこえたまひしかば」（若菜下(5)二〇三）と反論する。柏木の批判はあたらないというのだ。朱雀院の理想は、夕霧の発言にあったよ

うに光源氏の紫の上への寵愛を正統化するものであるとともに、女三の宮側には、一面において妥協を強いるものでもあった。柏木と異なり、女三の宮の幼さを知り尽くしている小侍従としては、光源氏の「夫の面」に不満があっても、「父の面」がより重視されるべきであることを切実に認識しているのである。世間一般の結婚とはちがうのだから、光源氏が「父」としての役割を果たしてさえいれば、たとえ「夫」としては冷淡であっても仕方がないのだという諦めも見受けられる。小侍従が柏木を手引きしてしまったのは、光源氏には感じられない女三の宮に対する男としての情熱を柏木に見たからではないだろうか。

しかし、柏木の一方的な情熱に、女三の宮はただおびえ、恐怖にふるえるだけである。密通の場面とその後には、突然の出来事におののき、「いとくちをしき身」(若菜下(5)二一二)であったと我が身を見つめて泣き、光源氏に過ちを知られることを怖れる女三の宮に筆が尽くされる。この事態に驚き、対処の仕方もわからずにただ泣くしかない女三の宮に対して、語り手も、「契り心憂き御身」(若菜下(5)二〇八)であることだと同情を隠さない。

ところが、女三の宮の沈みがちな様子は、光源氏を二条院から呼び寄せることになり、女三の宮の魅力として映るのであった。光源氏には、女三の宮が目も合わせないのは「久しくなりぬる絶えまをうらめしくおぼすにやと、いとほしく」(若菜下(5)二一二)感じられたのである。光源氏から見れば、女三の宮は、あの琴の伝授の日々で愛情が深まったいとしい「娘」であり、「妻」なのだ。女三の宮は、何も知らない光源氏を「いとほしく心苦しく」(若菜下(5)二一二)思う。妊娠がわかったときも、声も出ないほどに落ちこみ、顔色のすぐれない女三の宮を見て、光源氏は「日ごろの積りを、さすがにさりげなくてつらしとおぼしけると、心苦しく」(若菜下(5)二二六)思っている。女三の宮が嫉妬するまでに成長し、二条院に行ったきりの光源氏を恨んでいるというのは、光源氏の誤解にはちがいないが、これは本当に「誤解」なのか。

柏木が忍んできたとき、女三の宮が「何心もなく大殿籠りにけるを、近く男のけはひのすれば、院のおはするとおぼした」(若菜下(5)二〇五)ことを思い出したい。光源氏が来たのだ、と女三の宮がとっさに思ったというこの事実が挟まれたことで、女三の宮の悲劇性はいっそう鮮明になっている。光源氏は二条院に行ったまま帰らなかったのだ。そして、柏木の身勝手な振る舞いによって、女三の宮は物思いを知り、不幸な成長をしたのであった。光源氏は、その女三の宮にこれまでとちがう魅力を感じているのである。

光源氏は、紫の上につき添ったままであることを弁解して「いはけなかりしほどよりあつかひそめて、見放ちがたければ、かう月ごろよろづを知らぬさまに過ぐしはべるぞ」(若菜下(5)二一二)と言う。ここでも、朱雀院の理想とした光源氏と紫の上

の「娘ざまの妻」の歴史が、女三の宮という新しい「娘ざまの妻」の障害になっている。

妊娠という抜き差しならない状況になった今、お腹の子の本当の父親を知られることを怖れながらも、女三の宮は光源氏にすがり、このとき、紫の上のところに帰ろうとする光源氏をはじめて引き留める。妊娠を知ったばかりの光源氏も、いつになく積極的な女三の宮に抗しがたい魅力を感じただろう。「ただ世のうらめしき御けしきと心得たまふ」（若菜下⑸二二八）とある。嫉妬を知った「女」の態度と受け取ったのである。女三の宮は、あれから時折訪れる柏木から守ってほしかったのだろうか。そして翌朝、光源氏が柏木の手紙を発見してしまうのは、『無名草子』の批判するところである。

女三の宮は、軽率な手紙の管理を小侍従になじられても泣くことしかできない。それからの孤独な日々、女三の宮は「かくわたりたまはぬ日ごろの経るも、人の御つらさにのみおぼすを、今は、わが御おこたりうちまぜてかくなりぬる」（若菜下⑸二三七）と思い、朱雀院にまで過ちが知られることをさらにおびえる。ここから、女三の宮が光源氏のたまさかの来訪を恨み、待っていたことがわかる。女三の宮は、ゆっくりと時間をかけて光源氏への愛情と信頼とを育て、暖めていたのだろう。光源氏の「誤解」もすべて「誤解」ではない。

密通事件より前の女三の宮は、ただそこにある様子が多くの言葉を費やして言われるだけであり、生きた女三の宮はいなかった。事件後、おびえや怖れのただなかにいる女三の宮の内側が描かれて、その息づかいが聞こえるようになる。それまで、その幼さにばかり視線が向けられ、女三の宮の感情の機微は無視されていた。人形のように描かれていただけであった。それはそのまま、光源氏の女三の宮に対する向き合い方である。そのことが、女三の宮の不幸のはじまりであったと言える。琴の伝授を通して、女三の宮はようやく、一人の女性として認められ、光源氏の深いまなざしを手に入れようとしていたのだ。

罪の子をみごもった女三の宮は、延期を重ねて執り行われた朱雀院五十の賀で琴を演奏することもできなかった。本来ならば、光源氏の「父」としての教育の成果と「夫」としての愛情の証であり、夫婦の絆、紐帯ともなった女三の宮の琴の音を、朱雀院や今上帝の前で披露する晴れ舞台になるはずであった。物語は朱雀院の理想をことごとく拒絶する。女三の宮の琴の音を断ち切ったのは、紫の上の発病と、柏木の一方的な恋であった。

四　女三の宮の拒絶と「もののあはれ」

密通発覚の後、光源氏の柏木への嫉妬や、女三の宮への憐憫と憎悪が入り混じる苦悩や、光源氏を怖れて病に臥し、死に追いこまれてゆく柏木の懊悩が綿々と描かれる。それらの奥で、女三の宮は、自分を守るすべも知らずに、臆病な幼子のように運命の前でふるえている。何一つ自分で選択したことのない女

三の宮が、はじめて決断したのが出家であったのだ。「このついでにも死なばや」「尼にもなりなばや」（柏木(5)二七八）という願いは胸を打つ。

陣痛の苦しみの中で女三の宮は何を思ったのか。光源氏は生まれた子を抱こうともしなかった。女三の宮は、本当は死んでしまいたいのだ。我が身の存在を消してしまうよりほかに解決策は見つからなかった。柏木との「煙くらべ」（柏木(5)二七四）にも負けるわけがなかった。光源氏にも朱雀院にも、死を免れるために尼になりたいのだと言っている。死の代償としての出家なのである。事実、密通の衝撃からの緊張と、いたいけな身体での妊娠、出産による疲労とで、女三の宮は心身ともに痛めつけられていた。光源氏は、もはやこれまでかと思われていた紫の上がなんとか快復に向かっている身近な「例」（柏木(5)二八〇）もあるのだから、と気を強くもつようにたしなめるが、女三の宮にその言葉は届かない。女三の宮には、紫の上のように、光源氏とともにもう一度生きようとすることはできなかった。もう一人の〈紫の上〉になることを拒否しているのだ。紫の上とはちがう生き方を選択し、一歩踏み出そうとしている女三の宮が確かにここにいる。

光源氏に出家を訴えるときの女三の宮は、「常の御けはひよりはいとおとなびて」（柏木(5)二七九）いたという。女三の宮がこのように評されるのはここだけであることから、『湖月抄』は「女三はつねはかやうには、きと物のたまふ事はなきなるべし。是実は霊のいはせまゐらするなるべし」とする。この後実際に、紫の上の危篤騒動のときにも姿を見せた、六条の御息所の物の怪が現れる。この出家に物の怪の関与を重視する見解[注14]は根強いが、ここまでの女三の宮の歩みを否定することはできない。紫の上が息を吹き返し、女三の宮が髪を切った後になってから物の怪が現れるのは、それぞれの苦しみを声にできない二人に代わって語り、光源氏に訴えるためではなかったか。病や出家にまで追いこまれた二人の苦悩、痛みを代弁しているのであろう。[注15]むしろ物の怪は、紫の上や女三の宮に共感しているのではないだろうか。

光源氏は、女三の宮を引き留めようとするが、「頭ふりて」（柏木(5)二八四）拒む女三の宮に、「つれなくて、うらめしとおぼすこともありけるにや」（柏木(5)二八四）と、その心の奥を感じてもいたのである。物の怪が言わせているのか、女三の宮自身の決断か。その答えがはっきりしないところに意味があるのだろう。判断は光源氏と朱雀院に委ねられており、光源氏は物の怪のせいだとし、朱雀院は光源氏に対する恨みから、女三の宮の気持ちを汲み、出家させる。朱雀院はもう、「父」としても「夫」としても光源氏を信頼してはいないのだ。女三の宮は、仏道を通して、父朱雀院の許に回帰してゆく。

出家は、女三の宮の捨て身の抵抗であり、衰弱した身体から最後の力を振り絞り、万感の思いをこめた精一杯の、ぎりぎりの意志表示だったのではないだろうか。髪を切り、女としての

生を捨てることで示されたのは、我が身の運命に対する嘆きや逃避ばかりでなく、身体を張ってしかできなかった抗議、抵抗という強さをも孕んだ、生きることへの再出発だったのかもしれない。

光源氏は、この若い尼に執着し、せめて残される自分のことを「なほあはれとおぼせ」（柏木(5)二九八）と求めるが、女三の宮には疎ましく思われるだけである。女三の宮は言う。

かかるさまの人は、もののあはれも知らぬものと聞きしを、ましてもとより知らぬことにて、いかがは聞こゆべからむ。

（柏木(5)二九八）

女三の宮に執拗に「あはれ」を求めた柏木への返答とも思われるが、ここはやはり光源氏に向けられた拒絶であろう。あるいは、女三の宮にとっては柏木も光源氏も身勝手な愛を押しつけ、女三の宮の愛を求め、奪おうとする、もはや同一の存在なのだろうか。密通発覚から出家までの冷淡な態度とはまるでちがう光源氏の未練、執着は、女三の宮にとっては煩わしい。女三の宮の皇女の重さ、幼さだけを見て、その感情に触れようとしなかった光源氏に対する激しい反発ではないだろうか。これまで光源氏は、女三の宮に「もののあはれ」などというぬくもりある情を求め、見いだそうとしたことはなかったのだ。紫の上の「女ばかり、身をもてなすさまも所狭う、あはれなるべきものはなし。もののあはれ、をりをかしきことをも、見知らぬさまに引き入り沈みなどすれば……」（夕霧(6)六七～六八）という述懐にも似た響きである。どちらも光源氏とのずれを表明し、埋められない溝をどうすることもできない諦めを抱えていることを告白している。

鈴虫の巻冒頭、光源氏はもちろん、紫の上も積極的に後見して、女三の宮の持仏開眼供養が盛大に行われる。「姉」紫の上の協力を得て、「父」としての責任をかろうじて果たそうとする光源氏であるが、「夫」としての未練も捨て切れない。光源氏は「はちす葉をおなじ台と契りおきて露のわかるるけふぞ悲しき」（鈴虫(5)三四八）と詠みかけるが、女三の宮は「隔てなくはちすの宿を契りても君が心やすまじとすらむ」（鈴虫(5)三四八）と厳しくはねつける。これほど強い調子で光源氏を拒否する歌を女三の宮が詠んでいる。柏木との不幸な過ちが、女三の宮をこんなにも強くさせたのか。女三の宮は、光源氏の愛が真実でないことを知っている。密通発覚から出家にいたるまでの光源氏の冷淡だった態度を忘れてはいないのだ。光源氏のやさしさはいつも世間体を繕うだけのものであったことさえも、女三の宮は覚っている。そんなうわべだけの愛では、女三の宮が、もう一人の〈紫の上〉になれるはずもないのだ。光源氏は、女三の宮の拒絶に孤独を噛み締める。

八月十五夜、月明かりの下で見る女三の宮は、天の羽衣ならぬ尼衣をまとって遠くに行ってしまうかぐや姫のように、光源氏には感じられたかもしれない。

宮、

おほかたの秋をば憂しと知りにしをふり捨てがたき鈴虫の声

と忍びやかにのたまふ。いとなまめいて、あてにおほどかなり。「いかにとかや。いで、思ひのほかなる御ことにこそ」とて、

心もて草のやどりをいとへどもなほ鈴虫の声ぞふりせぬ

など聞こえたまひて、琴の御琴召して、めづらしく弾きたまふ。宮の御数珠引きおこたりたまひて、御琴になほ心入れたまへり。（鈴虫(5)三五三）

妊娠がわかったときに光源氏にそばにいてほしいと願った際に続いて、二度目の女三の宮からの贈歌である。「秋」に「飽き」を懸け、光源氏に飽きられたことを恨み、それでも振り捨てがたいものがあることを訴えている。女三の宮は幸薄かった半生をまっすぐに見つめている。尼衣を着ても、かぐや姫のようには飛び立てず、感情がなくなるわけでもない。女三の宮は、「もののあはれ」を知った、生きた女性なのだ。光源氏は、女三の宮の女らしい優雅さ、高貴さを見て、あなたこそ私を嫌って出家したのではないか、と切り返す。このすれちがいは修復の仕様もない。

ただ「失ってしまったもの」だけが二人に共通している。あの琴の伝授の時間である。光源氏の奏でる琴の音に、女三の宮は聞き入らずにはいられない。琴の伝授の時間は、決して幸福ではなかった女三の宮の人生の中で、最も明るく、懐かしい日々であったことを改めて感じさせる。[注16] 唯一、光源氏と共有した幸福な時間であり、少女から女へと成長しようとしていた時間であった。琴の音と鈴虫の声は響き合い、二人の心それぞれに、それぞれの音として突き刺さる。皮肉にも、その後の不幸を噛み締めれば噛み締めるほど、幸せだった記憶の大きさと明るさを思い知らされるのであった。もう二度と琴の音を共有することはできないのだ、という喪失感を露呈してしまった。思えば、あの女楽は六条院の最も華やかな一夜であったが、同時に限界でもあった。

結びにかえて

幼いばかりで、深い道心があったとは思えない女三の宮の、追いつめられた果ての出家は、紫の上の「許されない出家」と表裏であり、女の生き方についての問いかけともなるであろう。出家後もその幼さが光源氏や薫によって見て取られている女三の宮の、出家を懇願したときの「いとおとなび」（柏木(5)二七九）た瞬間こそ、女三の宮がその高貴さを発揮し、輝いた瞬間だったのではないだろうか。

そのあざやかな逆転は物語に色濃く刻印され、女の生の問題を突きつけている。そして、その悲しい役回りが果たせたのも、女三の宮自身が残酷な運命をたどり、幸福な時間を失い、それでもなおその運命に反発し、立ち向かったからにほかならない。

女三の宮の強さは、追いつめられ、断崖に立たされてはじめて、緊張感の中から発揮されるものである。女三の宮の苦悩、悲しみ、痛みを秘めた強さなのだ。

若菜以後の物語は、女三の宮と紫の上との二人の生が、光源氏をめぐって共鳴し、一つの物語を奏でている。いわば互いの生を照らし返し、映し出す鏡のような関係にあるように思われる。若く、しかも生まれたばかりの子を残して髪を下ろした女三の宮を、出家を許されなかった紫の上はどのような気持ちで見ていたのか。出家に追いつめられ、ぎりぎりの決断をした者と、許されない出家を断行しない者という隔たりはあっても、紫の上の思いは女三の宮に接近し、同じ愛に傷ついた「女」として寄り添い、みずからの出家への思いをも託したのではないだろうか。[注17] まるで「姉」のように「絵などのこと、雛の捨てがたきさま」（若菜上(5)八二）を女三の宮に語りかけながら、紫の上の脳裏には、光源氏を「後の親」（若紫(1)二四〇）のように慕い、無邪気に甘えていた少女時代の記憶が色あざやかによみがえったであろう。その光景を再現しようとする女三の宮の存在は、紫の上を足元から突き崩す脅威であったのはもちろんだけれど、同時に、不思議な共感、親近感をも感じたのではないかと思う。突然の女三の宮の出家の本当の原因はわからないまでも、追いつめられた逃避であろうとは想像できたであろう。紫の上は「内裏の聞こしめさむよりも、みづからうらめしと思ひきこえたまはむこそ、心苦しからめ」（若菜下(5)二三六）と女三の宮をいたわっていた。立場をわきまえての発言でもあろうが、それだけではないと思いたい。自分の身代わりであるかのように出家してゆく「妹」に、「姉」としてさまざまの思いを抱き、同情し、共感し、出家とは何かを反芻し、自らの生を顧みたのではないだろうか。かつて光源氏の「娘」であった女三の宮も紫の上も、いまや「父」光源氏をはるかに越えてしまっている。

出家は、女三の宮が〈紫の上〉を越え、自立した瞬間だったのかもしれない。女三の宮との別れに琴を奏でた光源氏は、その翌年の同じ八月十五夜、最愛の紫の上を天上に見送ることになる。光源氏の「息子」を生み、みずから女としての実人生の幕を閉じ、尼として生き続ける女三の宮と、光源氏と血の繋がらない「娘」に見看られて死を迎えた紫の上と、二人は、かたちはちがっていても、同じ女の物語を生きたのである。

—注記—

(1) 「女三宮」『解釈と鑑賞』第三六巻第四号、昭和四六年五月、至文堂、一〇八頁。

(2) 「女三の宮像—稚さへの設問—」『源氏物語　生と死と』昭和六三年、武蔵野書院、一一五頁。

(3) 「女三宮をめぐって—虚像的女人像の設定—」『源氏物語の形成』昭和四七年、桜楓社。

(4) 「女三の宮創造—幼稚な人柄の意味するもの—」『源氏物語の方法』昭和四四年、桜楓社。

(5) 「負性を帯びた主人公―女三の宮の造型をめぐって―」『源氏物語と平安文学　第三集』平成五年、早稲田大学出版部。
(6) 「女三宮の成長―母性を契機として―」『中古文学論攷』第十五号、平成六年十二月、早稲田大学大学院中古文学研究会。
(7) 「女三宮降嫁承引の過程について」『源氏物語の研究―光源氏の宿痾―』昭和五四年、教育出版センター。
(8) 「女三宮の降嫁」『源氏物語の研究』昭和三七年、未来社。
(9) 「皇女の結婚―女三宮降嫁の呼びさますもの―」『むらさき』第一六輯、平成元年七月、武蔵野書院。
(10) 「かの紫のゆかり尋ね取りたまひては、そのうつくしみに心入りたまひて……」（末摘花(1)二六七）。
(11) 他に「ねびゆかむさまゆかしき人かな」（若紫(1)一九〇）「この若草の生ひ出でむほどのなほゆかしきを」（若紫(1)二〇九）「げにいふかひなのけはひや、さりとも、いとよう教へてむとおぼす」（若紫(1)二一九）などとある。
(12) 「紫上の挨拶―若菜巻に於ける―」（注7前掲書）二八九頁。
(13) 『若菜』以後の紫の上」『源氏物語の史的空間』昭和六一年、東京大学出版会、一二五頁。
(14) 藤井貞和「光源氏物語主題論」『源氏物語の始源と現在　定本』昭和五五年、冬樹社。
(15) 武者小路辰子「若菜巻と六条御息所」（注2前掲書）、藤本勝義「源氏物語の死霊」（『源氏物語の〈物の怪〉―文学と記録の狭間―』平成六年、笠間書院）。
(16) 沢田正子「源氏物語の楽の音―女人造型の美意識とのかかわり―」『枕草子の美意識』昭和六〇年、笠間書院。
(17) この場面における女三の宮に対する紫の上の共感については、増田繁夫「鈴虫巻の世界」（『講座源氏物語の世界　第七集』昭和五七年、有斐閣）、三田村雅子「衣を贈る／衣を縫う」（『源氏物語　感覚の論理』平成八年、有精堂）、山口量子「鈴虫巻女三宮持仏開眼供養の位相―方法としての〈モノ〉―」（『玉藻』第二七号、平成三年十月、フェリス女学院大学国文学会）などの魅力的な論がある。